

<編集後記>

四手井綱英先生の自然に対するまなざしを引き継ぐ

12月号の編集作業を急ピッチで進めている折、本会名誉会員である四手井綱英先生の訃報を新聞で知り、大きな衝撃を受けました。「里山」は、今、アンダーユースの問題にぶつかりながらも、生物多様性を育むキーワードとされていますが、人と自然とのかかわりのなかでこの用語を提唱されたのが、まさに四手井綱英先生でした。本会誌においても「森林はモリやハヤシではない」をはじめ、ユニークでかつシャープな四手井論を展開されました。本誌に掲載した先生の最後の論考は、2007年28巻2号の「カシノナガキクイムシによるナラ枯れ害」です。数十年前に遭遇されたナラ枯れが、近年、再び拡大していることを憂い、ナラ林の未来と研究推進を強く訴えておられるその論考から、先生の自然に対する鋭く、暖かいまなざしが感じられます。自然保護に力を尽くされた豪放磊落な先生のエピソードについては、次号に掲載させていただきたいと考えています。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

さて今号は、昨年度に開催された「かんさい自然フェスタ2008」のシンポジウムとセミナーから、「大阪湾フォーラム」と「タンポポの繁殖干渉」に関する特集を掲載しています。「大阪湾フォーラム」に関する記事はテーブルから起こしたもので、当日の雰囲気があるまま伝わる企画となりました。本会誌をたどると、シンポジウムの討論会をそのまま記録し、会場の熱気が伝わる臨場感溢れた記事が、かつてよく掲載されていました。コーディネーターの山西大阪市立自然史博物館長に労をおとりいただき、久々にこのようなスタイルで記事が掲載できたことをうれしく思っています。

セイヨウタンポポとカンサイタンポポの遺伝子交雑は、長年続けられた市民によるタンポポ調査と研究者のコラボレーションによって明らかにされたものといえます。高倉氏と鈴木氏には「繁殖干渉」という新しい話題をわかりやすく記事にさせていただきました。また審査を経て、貴重な知見と示唆に富む投稿論文2報を掲載しています。第11回目となる「自然へのアプローチ」シリーズは、三重大大学生物資源学研究室をご紹介いただきました。寄稿・投稿いただきましたみなさまに感謝いたします。

改訂された執筆要領は前号(31巻1号)およびKONCホームページ(http://www.omnh.net/konc/Tokou_Yoryou.htm)に掲載されています。会員のみなさまの原稿をお待ちしています。次号は「信太山丘陵の保全と活用」に関するシンポジウム特集を予定しています。ご期待ください。

(前迫ゆり)

